立面の検討過程から見る松寿荘の特質について

－松寿荘における村野藤吾の設計過程に関する研究 その2－

ON THE DESIGN FEATURE OF SHOJU-SO IN THE EXAMINATION PROCESS OF ELEVATION

Research on the design process of Tohgo Murano in Shoji-so Vol. 2

角田 暁治*, 福原 和則**, 石田 潤一郎***

Akira KAKUDA, Kazunori FUKUHARA and Jun'ichiro ISHIDA

Tohgo Murano is one of the most important architects in modernization of Japan. Shoji-so is his masterpiece by the expression with a variegated detail and various space. In the elevation of Shoji-so, it is the feature to have integrated different volume and a style in that design. By analysis of his architectural drawings of Shoji-so's elevation, this research examines his design process along a progress chart, and clarifies that actual situation. It is a part of research which clarifies his design intension by verifying design process of Murano.

Keywords : *Tohgo Murano, Design process, drawing collection, Shoji-so*

村野藤吾, 設計過程, 図面資料, 松寿荘

1. はじめに

村野藤吾(1891-1984)は、日本の近代を代表する建築家の一人である。村野は機能や構造が理念的に意匠に反映されることに合理を求める近代建築全盛期に、ヒューマニズムを理念とした独自の作風を形成したが、村野の建築史上の位置付けは未だに定かではない。村野は中世の工匠のようにものづくりに打ち込み、その設計図面は途中過程に過ぎないとされてきた。しかし、その具体的な設計過程を記した記録はなく詳細は不明である。本論は初期検討案から竣工間際にいたるまで、村野、森建築事務所において作成、検討された様々な設計図面を分析し、彼の設計過程から設計方法や作品の特質を明らかにしようとする研究の一部である。前稿「日本生命日比谷ビルにおける村野藤吾の設計過程に関する研究」^{注1)}及び「西山記念会館における村野藤吾の設計過程に関する研究」^{注2)}は、村野の戦後の代表作である日本生命日比谷ビル及び晩年の作である川崎製鉄西山記念会館に関する事実を明らかにしたものであるが、村野の設計過程における特徴を客観的に分析するために、同様の調査を重ねることが課題であった。引き続き本研究においては、村野の晩年における代表作の一つである松寿荘を研究対象としてその検討過程を分析する。松寿荘の平面について図面の分析と考察を行った前稿

「平面の検討過程から見る松寿荘の特質について」^{注3)}の続編として、本稿では松寿荘の立面図の検討過程を分析し、その特質を考察するものである。また、断面図に見られる検討項目は外観に関するものがほとんどであり、立面図と重複するため、本稿に断面各図の変遷の分析は含まない^{注4)}。

資料となる村野、森建築事務所の設計図面は、現在、京都工芸繊維大学美術工芸資料館に寄託され、同館において設計図面の整理、研究が行われている。その総数は55,560枚(2007年6月16日現在)である^{注5)}。収蔵品として登録される設計図面には、AN. ○○○○—○○○(AN. はアーカイブNo. の略)の形式で1枚ごとに番号が付され、名称、シートナンバー、縮尺、サイン、紙質、筆記用具、製作日時、寸法が記録され、京都工芸繊維大学美術工芸資料館の年報に順次記載されている。

2. 分析の方法

京都工芸繊維大学所蔵の松寿荘の設計図面は343点であり^{注6)}、それらのほとんどが意匠図である。意匠図には、一般図から詳細図、原寸図まで幅広い種類の図面が含まれる。また、村野事務所で作成された図面に加え、施工者が作成した施工図に村野が手を加えたもの

* 京都工芸繊維大学大学院 准教授・博士(工学)

** 大阪工業大学 教授・博士(工学)

*** 京都工芸繊維大学大学院 教授・工博

Assoc. Prof., Graduate School of Architectural Design, Kyoto Institute of Technology, Dr. Eng.

Prof., Osaka Institute of Technology, Dr. Eng.

Prof., Graduate School of Architecture and Design, Kyoto Institute of Technology, Dr. Eng.

も多く含まれる。本稿においては、外観の検討過程を明らかにするために立面図を対象として扱い^{注7)}、分析を行う。立面図を分類して、図面相互の変更箇所を追うことにより以下の項目を明らかにする。①設計図面作成時期と建設工程 ②検討図の変遷 ③各検討図における検討内容である。各図の内容を比較検討することで、それらの作成順序を明らかにする。前項「その1」においては、図面間のまとまりをフェイズと名付けた分類を行なったが、本稿においては、煩雑化を避けるため、変更項目に通し番号を付して分類する。また、図面の分析と合わせて、関係する書籍や村野の私的書簡等の調査、関係者に対するインタビューを実施して、松寿荘の外観表現の設計プロセスを明らかにする。

3. 松寿荘の概要

3-1 概要

松寿荘（概要を表1に示す）は、出光興産の迎賓館として、その創始者である出光佐三の依頼により建設された^{注8)}。建物にはレセプションホールや食堂、貴賓室に加え、和室の大広間やゲストルームとしての宿泊室が設けられている。館名は、出光店主の厳父、松寿翁の名から由来している^{注9)}。施工は鹿島建設株式会社が担当し、1979年に竣工した。残念ながら2003年に解体され、現在は存在していない。

表1 松寿荘建築概要

建築地	東京都港区
延床面積	1449.51㎡
構造	鉄筋コンクリート壁式構造 一部鉄骨造
階数	地下1階 地上2階
用途	レセプションホール、貴賓室、大広間、宿泊室
外壁仕様	特性タイル張り 目地：指定石粉入りモルタル詰め
和室外壁仕様	リシン掻落し
屋根仕上	8オンス 八つ切りハゼ銅版葺き
内部仕上	1階ロビー 天井：石膏格天井 壁：トラパーチン 床：トラパーチン 絨通置敷き レセプションホール 天井：檜板張り 壁：絨織 床：寄木張り 絨通置敷き 貴賓室 天井：特性裂地張り 壁：特性裂地張り 床：絨敷敷詰め 大広間 天井：桐板格天井 壁：紅色本ジュラク塗り 床：畳敷込み
着工	1977年（昭和52年）9月
竣工	1979年（昭和54年）8月

3-2 立面に関わる施主要望

出光佐三と村野の関係は、出光興産蛸殻町給油所^{注10)}（1955）に始まる。その後、指月邸（北川邸 1959）と名付けられた出光店主の住居の仕事において、村野は出光店主夫人の信頼を得た。以後村野と出光との関係が深まり^{注11)}、1960年以降、給油所の仕事を多く手掛けた。松寿荘の設計の当初において、施主からは下記項目が要望事項として示された^{注12)}。

- （1） 50台ほどの駐車台数を確保すること。
- （2） 建物を高くせぬこと、敷地いっぱいに建てぬこと。
- （3） なるべく日本的であること。
- （4） お金は必要とあればかけてもよいが無駄をせぬこと。
- （5） 道を通る人から中が見えないようにすること。

これを基に、村野事務所と出光興産の合同で建設委員会が構成され、プランの原案が検討された^{注13)}。（2）、（3）、（5）が、外観に関する項目である。出光佐三は、一通りの要望を伝えた後は一切口出し

せず、全て村野に任せるという姿勢を貫いた^{注14)}。施工者に対して「村野先生のご指示通りの建物を造りなさい」と内示を出していた^{注15)}。また、竣工時期についても決められてはいなかった。これらのことは、出光佐三の村野に対する信頼を示しており、その信頼があればこそ、松寿荘という建築に、村野は建築家としての思いを存分に込めて検討を重ねることが可能となった。

3-3 設計工程及び工事工程の概要

基本設計図は、最初期のものとみられる1階平面図の裏面に「二次案 51.12.13」の記入がある。1977年1月の設計依頼に先立って、図面のやり取りが行なわれていたことが推察できる。1977年8月には、この最初期案とは異なった形で確認申請が提出された。本稿において対象とする立面図は、本稿において対象とする立面図は、1977年5月からその年の後半にかけて作成された。一方、前稿^{注17)}によって示した様に、平面の検討は1976年後半から始まっている。このことから、平面の検討が先行して行われ、その後立面の検討へと進んだことが分かる^{注18)}。着工時点では基本設計図が施工者に提示され、実施設計は工事の進捗と並行して行われた^{注19)}。工事中に検討・変更が行われ、施工に反映された。村野事務所で作成された1977年4月14日付の設計工程表によると、4月に基本計画の施主承認^{注20)}、7月に実施設計完了と確認申請を提出し、9月に着工予定、翌1978年9月竣工予定となっている。一方、施工を請け負った鹿島建設の着工時工程表は、1977年10月4日着工、地上躯体完了予定が1978年3月末、1978年9月30日竣工の工期12ヶ月間となっており内容が一致する。しかし、実際の工事は、地鎮祭が1977年9月16日に、上棟祭は1978年6月15日に行われ^{注21)}、1979年8月10日に竣工式を迎えた。鹿島建設の工程に比べて、躯体工事で2ヵ月半の遅れがあり、工期は最終的にほぼ一年延長された^{注22)}。

4. 立面における検討過程

4-1 検討図の概要

基本設計図における立面図を分類し、その検討過程を分析する。検討跡の認められる立面図は、北・西・レセプションホール南面の立面図が8種類、東・南・大広間北面の立面図が6種類である。前者を<A群>、後者を<B群>とし、時系列に沿った図面作成時期が同一の図面に、①から⑧までの同じ分類番号を付す^{注23)}。各図の概要を表2に示す。⑥、⑦各図には日付が無いが、前後の図面を含めた各図の内容から同時期のものと考えられる。

表2 立面各図の概要

	分類番号	AN番号	図面用紙	検討対象	日付
<A群> 北面 西面 レセプションホール 南面	①	AN4898-11	青焼図・描込図面	屋根	記入無し
	②	AN4898-31	青焼図・描込図面	屋根・開口	1977.05.28
	③	AN4898-33	青焼図・描込図面	屋根	1977.05.31
	④	AN4898-40	青焼図・描込図面	屋根	1977.05.31
	⑤	AN4898-35	青焼図・描込図面	屋根	1977.06.04
	⑥	AN4980-46	第二原図・清書図面	確認申請図	記入無し
	⑦	AN4898-53	青焼図・描込図面	屋根・開口	記入無し
	⑧	AN4980-12	原図・清書図面	竣工図	1977.11.01
<B群> 東面 南面 大広間北面	②	AN4898-36	青焼図・描込図面	屋根	1977.05.28
	③	AN4898-38	青焼図・描込図面	屋根・開口	1977.05.31
	⑤	AN4898-39	青焼図・描込図面	屋根・開口	1977.06.04
	⑥	AN4980-47	第二原図・清書図面	確認申請図	記入無し
	⑦	AN4898-54	青焼図・描込図面	屋根・開口	記入無し
	⑧	AN4980-13	原図・清書図面	竣工図	1977.11.01

北・西・レセプションホール南面立面図（A群）は、A①～A⑤及びA⑦が青焼図面に描き込まれた検討図である。A①は最初期の検討図、A②、A③は同一図面を基にした屋根検討図である。A④は初めて現れる北面図である。A⑤はA③のコピーに、指示を言葉で補足したものである。A⑥は確認申請図^{注24)}で、各部の屋根や開口部の検討図A⑦を経て竣工図A⑧^{注25)}に至る。

東面・南面・和室北面立面図（B群）は、B②～B⑤及びB⑦が描込検討図である。A②が主として南側部分の屋根検討図、B③はB②と同一の下図に描き込まれた検討図である。B⑤はスタッフへの指示のためのB③のコピーであり、B⑥が確認申請図である。B⑦では屋根形状や高さを検討している。東面の窓形状もほぼ実施形に近くなるが、大屋根や宿泊室屋根の頂部には「未定」の書き込みがある。B⑧は竣工図である。各図とプロジェクト進行の経緯との関係を表3に示す。

表3 プロジェクトの経緯と立面図の作成時期

	出来事	北・西・レセプション南面立面図 ＜A群＞	東・南・大広間北面立面図 ＜B群＞	備考	村野事務所作成工程 作成工程
1959	指月亭竣工				
1968	4月 土地購入				
1976	1.29 塀図面作成				基本設計
	2.18 塀見積提出				
	3～7月 塀施工				
	12.13			平面検討図初出	
1977	1月 設計依頼				実施設計
	4.14 事務所作成工程表	A① AN. 4898-11			
	4.18 ポーリング位置指定				
	5.28	A② AN. 4898-31	B② AN. 4898-36		
	5.31	A③ AN. 4898-33, A④ AN. 4898-40	B③ AN. 4898-38		
	6.3				
	6.4	A⑤ AN. 4898-35	B⑤ AN. 4898-39		
	8.30 確認申請受付	A⑥ AN. 4980-46	B⑥ AN. 4980-47	確認申請	
	9.16 地鎮祭			着工	
	10.4 確認済証発行	A⑦ AN. 4898-53	B⑦ AN. 4898-54		
	11.1				
1978	6.15 上様式	A⑧ AN. 4980-12	B⑧ AN. 4980-13	竣工図	竣工 '78.9月中旬
	6.8 検査済証発行				
1979	8.10 竣工式				

4-2 立面における変遷

立面における各図の変遷を表4に示す。これらの各図から読み取れる変更箇所を表5及び表6に示す。ここで抽出する変更内容は、形状や寸法における変更が認められる項目を対象とする。表5は＜A群＞を対象とし、表6は＜B群＞を対象とする。各表中の項目番号に用いる。表5、表6において示した対象部分を図2に示し、変更内容を表7に示す。また、変更内容の全項目番号を竣工図上にプロットしたものを表8に示す。各変更項目は、A、B各群の分類と、各項目の番号を組み合わせると並列に表記する。以下に、表5、表6において分類した部位ごとに、検討・変更の過程を分析する。

＜全体構成＞

平面は西側に開いたコの字型であり、北側にレセプションホールや貴賓室が、南側に和室大広間が、夫々東西方向を長手として配置される。南北方向を長手とする食堂がその両者をつなぐ形である。

立面全体では、建物北側のレセプションホールと南側の大広間、そしてその両者をつなぐ2階建ての宿泊室・食堂という三つの部分の屋根の構成に検討の跡が見られる。初期案では、村野の作である都ホテル佳水園（1960）のように、複数の屋根を組み合わせで複雑

に入り組んでいる屋根形状が検討され、それを元に村野が曲線を用いることによって変形を施した^{注26)}。その過程で描かれた図面が①（図1）である^{注27)}。①からA②で、食堂上部と大広間の間のクーリングタワー置場の屋根が独立した形となる（A3）。同時に、2階宿泊室部屋根が曲面化し、南側管理諸室屋根の高さが上げられて、それぞれが独立して見えるようになる（A2）。AB⑦でこの両部分の屋根が再び連続し（A38,B34）、竣工に至る。施主要望の一つである、道路からの見え方に関する道路境界側の軒先高さは、西側境界は、①から竣工図AB⑧まで軒高さが境界塀と連続している。南側境界は、①では2層分の高さであるが、A②で境界塀高さに合わせて変更される（A4）^{注28)}。

図1 立面図①（AN. 4898-11）

＜玄関＞

玄関屋根は、大屋根から連続して北へ伸びる構成は、A②からA⑧まで変わらない。しかしその形状は、A②からA⑥までは厚みのない見付の薄い、反った屋根である。北立面図でも、根元部分の1階下屋と滑らかに曲面で連続した形状であることが分かる。A⑦で寄棟となり、屋根の厚みも増している（A20,A21）。これにより、玄関としての存在感が強まっている。

＜レセプション・貴賓室・サンルーム＞

この部分は、西側に配置された1層の談話室や貴賓室、サンルームから、2層吹抜けのレセプションホールへと、屋根高さが変化する部分であり、この建物の屋根において最も重要な部分である^{注29)}。西側の平屋部分からは、2階屋根へと連続していく屋根と、レセプションホールの南北側に下屋として1階の屋根が連続する二つの部分に分かれている。

①において基本的な曲面形態のイメージが描かれ、A②でそれが図面化される。これ以降、この部分の屋根の全体形態には変化はないが、A②からA③で全体高さが上げられ（A5）、A⑥からA⑦で厚みが増す（A26）。また、西立面図に示されるように、大屋根は箕甲の形状とされているが、その稜線の間隔がA⑥からA⑦で狭まるとともに平行となり（A24）、A⑦からA⑧でその間隔が広げられる（A49）。2階大屋根と一体化する1階下屋西側の壁取合部形状は、A⑤からA⑥で曲率が小さくなり（A17）、A⑥からA⑦でやや直線化し（A27）、A⑧では直線となる（A48）。図3に変更過程を示す。

また、大屋根と南へ伸びる宿泊室の屋根は、両者の軒先線はA⑥までは直線を介在させることで分割した表現とされているが、A⑦でその取合部が曲線により連続する（A25）。A⑧でさらに深く挟ら

表 4 立面図の変遷

	北面	西面	レセプションホール南面
①			
A②			
A③			
A④			
A⑥			
A⑦			
A⑧			
	東面	南面	大広間北面
B②			
B③			
B⑥			
B⑦			
B⑧			

A, B 群とも、③→⑤は変更内容が見られないため、⑤は割愛する。

表 5 北・西・レセプションホール南面 立面図における変更箇所と変更時期

＜A群＞北・西・レセプション南面		玄関	レセプション・貴賓室・サンルーム		宿泊室・食堂		クーリングタワースペース		大広間・渡廊下		南側管理諸室・ファンルーム	
分類番号		屋根	壁・開口	屋根	壁・開口	屋根	壁・開口	屋根	壁・開口	屋根	壁・開口	屋根
①		①→②		1		2		3				2, 4
②		②→③		5, 6		7, 8		9	10			
③		③→⑤										
④		④→⑥	11	12								
⑤		⑤→⑥	13, 14	15	16, 17, 18				19			
⑥	確認申請図	⑥→⑦	20, 21	22	23, 24, 25 26, 27	28	29, 30, 31, 32	33		34	35, 36	37, 38
⑦		⑦→⑧		39, 40, 41, 42	43, 44, 45, 46 47, 48, 49		50, 51, 52 53, 54	55	56	57	58, 59, 60, 61	62
⑧	竣工図											

*④は北立面図のみが最初に描かれた図面である。

表 6 東・南・大広間北面 立面図における変更箇所と変更時期

＜B群＞ 東・南・大広間北面		玄関	レセプション・貴賓室・サンルーム		宿泊室・食堂		クーリングタワースペース		大広間・渡廊下		南側管理諸室・ファンルーム	
分類番号		屋根	壁・開口	屋根	壁・開口	屋根	壁・開口	屋根	壁・開口	屋根	壁・開口	屋根
①	確認申請図	①→②										
②												
③			1		2, 3		4, 5, 6		7, 8	9	10, 11	
④												
⑤												
⑥					12, 13	14				15	16, 17	18, 19
⑦					20, 21	22, 23, 24, 25		26, 27, 28		29	30, 31	32, 33, 34
⑧		竣工図			35, 36		37, 38, 39	40	41	42, 43, 44	45	46, 47, 48, 49

表 7 各立面図における変更内容

＜A群＞北・西・レセプションホール南面			＜B群＞東・南・大広間北面		
	項目番号	変更内容		項目番号	変更内容
①→②	1	大屋根頂部に三角部分（▽）が現れる。	②→③	1	大屋根全体が高くなる。（約350mm）
	2	宿泊室と南側管理諸室屋根の見え掛りが独立する。		2	宿泊室屋根に棟瓦を無くす指示が現れる。
	3	クーリングタワー部屋根が独立して棟高さが高くなる。		3	東面軒高が下がる。（約300mm）
	4	南側屋根が反った形状となり、軒高さが低くなる（5,200mm→2,300mm）。		4	クーリングタワー部屋根棟が換気のため開放される。
②→③	5	大屋根全体が高くなる。（約350mm）	⑤→⑥	5	クーリングタワー部屋根見付形状が末広がりになる。
	6	大屋根と下屋の取合部（南面西端）形状が曲線化する。		6	クーリングタワー部屋根に棟瓦を無くす指示がされる。
	7	レセプションホール屋根と宿泊室屋根の間の僅みが無くなる。		7	大広間屋根に棟瓦を無くす指示がされる。
	8	棟瓦を無くす意図が現れる。		8	大広間屋根とファンルーム屋根が分離される。
④→⑥	9	クーリングタワー部屋根棟が換気のため開放される。	⑥→⑦	9	管理諸室南面開口部形状が変更される。
	10	外壁に「板張り」の書き込み。		10	南面屋根が分割される。（4分割）
	11	大屋根と下屋の取合部（北面西端）位置が西へ移動する。		11	管理諸室屋根高さが下がる。（約300mm）
	12	談話室北側の石壁が無くなる。	⑦→⑧	12	東面1階窓形状が正方形から縦長に変更される。
⑤→⑥	13	玄関屋根の高さが上がる。		13	2階宿泊室東面開口割が均等に分割される。
	14	大屋根北西部と玄関屋根の軒先が連続する。		14	宿泊室部屋根に煙突が現れる。
	15	レセプション下屋の壁取合部の立上りが無くなる。		15	大広間屋根と2階ファンルーム屋根が分離する。
	16	大屋根頂部三角部分（▽）の大屋根からの段差が明確化する。	⑥→⑦	16	管理諸室南面開口部形状が変更される。
⑥→⑦	17	大屋根と下屋の取合部（北面西端）形状の曲線半径が小さくなる。		17	2階ファンルーム南側開口部形状と位置が変更される。
	18	サンルーム屋根のアーチの数が減る。		18	南面屋根が4分割から3分割に変更される。
	19	渡り廊下の壁が手摺となる。		19	建物南東部2階軒先線が1階下屋のそれより西側へ入る。
⑦→⑧	20	玄関屋根が寄棟となり、大屋根からの独立性が高まる。	⑦→⑧	20	東面1階窓形状が、数とブローションが変更される。
	21	玄関屋根高さが高くなり、起りだす。		21	2階宿泊室東面開口割が不均等な分割に変更される。
	22	レセプション2階に窓（南北両面）が現れ、それに中止の×が記入される。		22	宿泊室北東角の出窓部分の独立下屋が無くなり、大屋根に取り込まれる。
	23	大屋根頂部三角部分が逆向きになり（▽→△）、大屋根との段差の無い滑らかな一枚屋根になる。		23	宿泊室屋根と管理部分屋根の軒先が連続する。
⑦→⑧	24	大屋根両サイドの稜線が末広がりから平行になり、その間隔が小さくなる。	⑦→⑧	24	南面屋根が分割に従って棟と谷が現れる。
	25	大屋根と宿泊室屋根西側が、曲線で滑らかに連続する。		25	宿泊室屋根の煙突が南に移動する。
	26	大屋根高さが上がり屋根の厚みが増す。（8,753mm→9,053mm）		26	クーリングタワー部大和棟の見付巾が大きくなり、箕甲の形になる。
	27	大屋根と下屋の取合部（北・南面）形状（上記6,17）がやや直線化する。		27	クーリングタワー部大和棟に「飾棟」の指示が記入される。
⑦→⑧	28	宿泊室北面に袖壁（風除）が現れる。	⑦→⑧	28	クーリングタワー部大和棟高さが上がる。（8,100mm→9,000mm）
	29	食堂上部1階下屋と、2階宿泊部屋根が分離される。		29	大広間屋根と2階ファンルーム屋根が曲面で再び連続する。
	30	食堂と大広間の間の軒高が、レセプションや食堂西側部分よりも低くなる。		30	2階空調機室北面窓が長方形から円形となる。
	31	宿泊室北東角の出窓部分の独立下屋が無くなり、大屋根に取り込まれる。		31	管理諸室南面開口部形状が変更される。
⑦→⑧	32	宿泊室屋根が曲面から平面で構成された寄棟となる。	⑦→⑧	32	2階屋根南東部軒先ラインが、角がでて反り上がる。
	33	クーリングタワー部大和棟の見付高さが大きくなり、箕甲の形になる。		33	南面屋根が雁行と寄棟の組合せとなる。
	34	大広間屋根と2階ファンルーム部分の屋根が連続する。		34	南側管理ゾーン屋根の棟高さが低くなり、屋根の独立性が消える。
	35	2階ファンルーム丸窓が格子になる。		35	大屋根頂部がファンルームを包含した大きな弧になる。
⑦→⑧	36	南側管理ゾーン南西部和室の窓の格子が大きくなる。	⑦→⑧	36	サンルーム屋根軒高さが周辺より下がる。
	37	南側屋根に起りがつけられる。		37	宿泊室屋根棟形状が変更される。
	38	南側管理ゾーン屋根の棟高さが低くなり、屋根の独立性が消える。		38	宿泊室屋根煙突が宿泊室中央部に移動する。
	39	レセプション2階窓（南北面）形状変更。		39	宿泊室屋根棟南端に入母屋形状となる。
⑦→⑧	40	中庭外壁開口（格子）が小さくなる。	⑦→⑧	40	クーリングタワー部妻壁に松文様のくり型の開口が現れる。
	41	レセプション2階ホール窓（南北両面）横の格子が無くなる。		41	クーリングタワー部大和棟高さが上がる。（9,000mm→9,250mm）
	42	談話室西面開口の高さ寸法が小さくなる。		42	大広間北面開口が格子窓となる。
	43	中庭部分の屋根開口位置が移動する。		43	大広間屋根とファンルーム屋根の間に開口が設けられる。
⑦→⑧	44	大屋根頂部の△が無くなり、更に滑らかな形状になる。	⑦→⑧	44	大広間南西部待合に格子開口が現れる。
	45	大屋根と宿泊室部屋根西側取合部がより深く挟られる。		45	大広間屋根とファンルーム屋根の連続面が曲面から平面となる。
	46	サンルーム屋根軒高が貴賓室屋根より低くなる。		46	大広間上部空調機室北西部外壁形状が複雑化する。
	47	サンルーム屋根形状がヴォールトでなくなる。		47	同上部に円形窓が現れる。
⑦→⑧	48	大屋根と下屋の取合部（北・南面）形状（上記6,10,26）が直線化する。	⑦→⑧	48	管理諸室南面開口部形状が変更される。
	49	大屋根両サイドの稜線の間隔が広がる。		49	2階ファンルーム南側開口部まぐさアーチ状となる。
	50	宿泊室屋根棟南端に入母屋形状となる。		50	南面屋根の雁行がなくなる。
	51	建物最高高さが上がる。（9,053mm→9,303mm）		51	2階屋根南東部軒先ラインが、反りから水平になり南の勾配に連続する。
⑦→⑧	52	宿泊室屋根に煙突が現れる。	⑦→⑧	52	建物南東部2階屋根勾配部分軒先線がさらに西側へ入る。
	53	宿泊室屋根と2階管理部分屋根の軒先（東面）が連続する。			
	54	宿泊室北東角の出窓部分に再び庇が現れる。			
	55	クーリングタワー西面開口が格子窓となる。			
⑦→⑧	56	クーリングタワー部屋根棟の立上りが無くなる。	⑦→⑧		
	57	大広間西面の開口が無くなる。			
	58	南側ファンルーム部屋根取り合い部に開口。			
	59	南側管理ゾーン南西部和室の窓の格子が無くなる。			
⑦→⑧	60	2階廊下南面窓の格子が無くなる。	⑦→⑧		
	61	2階空調機室西面窓が縦長から横長格子窓となる。			
	62	南側屋根の起りが無くなる。

イ：玄関
ロ：レセプション・貴賓室・サンルーム
ハ：宿泊室・食堂
ニ：クーリングタワースペース
ホ：大広間
ヘ：渡廊下
ト：南側管理諸室・ファンルーム

図 2 変更箇所区分図

表 8 変更項目プロット図

A ⑧ AN. 4980-12	北面	
	西面	
	レセプションホール 南面	
	東面	
B ⑧ AN. 4980-13	南面	
	大広間北面	

れた形となる (A45)。図4にその過程を示す。レセプションホール南西部に配置されたサンルームは、庭に面して突き出した部分である。その平面形状が当初は複数の凹凸が並ぶものであったため、屋根形状もA②からA⑦までは、平面に合わせて小さな曲面形状が連続する構成であった。その軒高さは、大屋根の一部を成す西側の貴賓室の軒先と揃っていた。1階平面の竣工図 (AN.4980-09) ではサンルーム形状が円形に近い多角形となっており、屋根もそれに合わせてA⑧で曲面形状が無くなり (A47)、軒高さも下げられる (A46)。
 <宿泊室・食堂>

2階宿泊室屋根は、①からA②でレセプションホール大屋根との間に窪みが生まれるが、A③でその窪みは無くなる (A7)。屋根の全体形状は、A⑥までは曲面で構成されているが、A⑦で寄棟に変化する (A32)。A②からA⑥では、2階曲面屋根の一部が1階食堂西側下屋まで延びて両者が接続されている。A⑦で、宿泊室の屋根形状が曲面ではなくなることに伴い、この延長部分が無くなり、下屋とも分離される (A29)。図5にその過程を示す。

食堂は、西と南の二面で庭に面しているが、その二面の軒高さはA②からA⑥までは、同じ高さで軒が回っている。その高さは、A⑥では地面から2,750mmである。しかしA⑦で、大広間側の庭に面した食堂南面の軒高さが300mm下げられ2,450mmとなり、そのまま竣工する (A30)。図6にその過程を示す。

また東面では、B②からB⑥までは2階宿泊室屋根とその南側の1階管理諸室屋根が分離していた。しかし、B⑦で軒先が曲線を用いて連続する形状に変更された (B23)。

A③ AN. 4898-33 南面図
 (A⑤AN. 4898-35 はA③のコピーである。)

↓ A17

A⑥ AN. 4980-46 南面図

↓ A27

A⑦ AN. 4898-53 南面図

↓ A48

A⑧ AN. 4980-12 南面図

図3 大屋根と下屋の取合部の変更過程

A⑥ AN. 4980-46 西面図

南面図

↓ A25

A⑦ AN. 4898-53 西面図

南面図

↓ A45

A⑧ AN. 4980-12 西面図

南面図

図4 大屋根と宿泊室屋根の取合部の変更過程

A⑥ AN. 4980-46 西面図

南面図

↓ A29

A⑦ AN. 4898-53 西面図

南面図

図5 2階大屋根と1階下屋の取合部の変更過程

A⑥ AN. 4980-46 南面図
↓ A30

A⑦ AN. 4898-53 南面図

図6 食堂南側下屋軒高さの変更過程

＜クーリングタワースペース＞

①ではこの部分には独立した屋根は描かれておらず、大屋根の形状変更と開口部らしきものが描かれ、その存在を示すのみである。A②で、全体の大屋根を分断するかのように高い屋根^{注30)}が現れ(A3)、連続していた屋根を南北に分断する(A2)。AB②では閉じていた棟部分は、AB③で換気のために開放する意図が図示される(A9,B4)。その後AB⑥までは変化が無いが、AB⑦で高さが上げられるとともに箕甲の形となり(A33,B26,B28)、棟部に立上りが検討される(B27)。AB⑧で示されるように竣工時には棟の立上りはなくなり(A56)、更に棟高さが上がる(B41)。西面の開口部は、楕円形の組合せで検討されていたが、A⑧で長方形の格子窓に変化する(A55)。また南側妻壁には、松文様のくり型開口が現れる(B40)。
＜大広間・渡廊下＞

大広間の屋根形状そのものは、当初より竣工まで入母屋のまま変更が無いが、東側の2階建部分との屋根取合部において、検討の過程が見られる。大広間屋根とその東側2階に配置されたファンルーム屋根は、B②では曲面で連続しているが、B③で分離され(B8)、ファンルーム屋根の下に大広間屋根が入り込む。この時は、ファンルーム壁との取合部の大広間屋根は曲面であるが、B⑥でその曲面が無くなる(B15)。B⑦で大広間屋根の棟が曲線となり、再びファンルーム屋根へと連続し(B29)、B⑧で両部分の連続面が、曲面から平面となる(B45)。各図を通して、ファンルームの開口や格子のデザインが推敲されている(B17,B43)。断面図では、確認申請以降に大広間の天井高さの変更が見られるが^{注31)}、それに伴う立面の変更はない。＜南側管理ゾーン・ファンルーム＞

南側道路に面する立面においては、①では2階部分が南端まで伸びており、軒高さはGL+5,200mmである。A②以降、2階部分の南側が縮小され、2階屋根が1階軒まで連続し軒高さが下げられる(GL+2,300mm)(A4)。A⑥以降の西立面図に、道路境界塀が描かれる^{注32)}。屋根形状は、A②で描かれた反りのある曲面屋根が、A⑦で起

のついた形状となり(A37)、A⑧では起りの無い寄棟に変化する(A62)。また、屋根の平面形状は、B②からB③で4分割され(B10)、B⑥で3分割となり(B18)、B⑦で雁行と寄棟の組合せとなる(B33)。B⑧で雁行が無くなる(B50)。東面軒先は、B⑦では2階軒先の折れるところが反り上がった形状となっている(B32)が、B⑧では直線化する(B51)。軒先の位置は、B⑤までは南東角の位置のまま北へ連続するが、2階東面外壁位置の変更に伴い、B⑥でそれより西へ入り(B19)、B⑧で宿泊室軒位置よりもさらに西へ入る(B52)。

5. 立面に関わる工事での検討過程

5-1 模型による検討過程

村野の他作品における設計検討と同様に、松寿荘においても図7のような模型^{注33)}を用いることで、各部のデザインや形態が決定された。複雑な曲面形状の屋根形態については、特に村野は力を入れており、粘土による1/200や1/20の模型により検討を進めた^{注34)}。模型は、図面での検討と並行して進められた。曲面が多用されることから、最終的には模型で形状を決定し、その模型を測って図面化が進められた^{注35)}。粘土作りの全体模型がまず初めに現場に運び込まれ、まもなく各詳細模型も持ち込まれた^{注36)}。出光店主に対して、模型を用いて説明が行われた^{注37)}。工事の進行とともに、全体の屋根形状の他に、アプローチ門扉、大広間床の間などが模型で検討された。門扉においては、原寸大のモックアップを製作し、現場での検討が行われた^{注38)}。

図7 全景模型写真

5-2 施工上の検討課題と解決方法

着工にあたり、施工者からは具体的な施工方法についての検討・提案がなされた。曲面大屋根銅板葺の雨仕舞と、メンテナンスを考慮した設備と建築との取合い納りが施工上の注意事項として挙げられている^{注39)}。建物形状を特徴付ける屋根については、仕上げ曲線に影響しない形状でコンクリートを打設し、その上に木造束材を立て、野地板を張って曲面屋根下地を作り、最終の仕上げ曲線は、その上にラスモルタルで行う方法を検討している^{注40)}。一方軒裏については、曲面を為す大屋根の底は、木を削りだした型枠による現場打ちコンクリートで施工している^{注41)}。また、屋根防水を確実にするために、仕上葺材の銅板の下面にも防水層を設ける提案が施工者から行われ^{注42)}、シート防水で施工された。また、設備的には、ク

ーリングタワーや機械室の機器による騒音の処理や、処理空気のショートサーキットへの懸念が検討課題として挙げられている^{注43)}。

その他、軒樋素材（アルキャストから銅板葺に変更）、サッシュ素材（コルテン鋼からステンレスのアルキャスト仕上に変更）の変更等が、外観に関わる着工後の変更項目として挙げられる^{注44)}。施工者作成の打合記録に認められる工事中の変更・検討項目一覧を表9に示す。

表9 施工中の変更・検討項目

日付	検討部位	検討内容	結果
1977.12.8	軒樋	アルキャスト → 銅板	変更
	サッシュ	コルテン鋼 → アルキャスト	変更
	フロアヒーティング熱源	温水 → 電気蓄熱式	変更
	クーリングタワー	騒音、ショートサーキット	打合せ
	2階機械室	騒音	打合せ
1978.5.22	屋根銅板下地	防水層設置	打合せ

6. まとめ

本稿の検証によって、以下の内容が明らかになった。

- 1) 村野はクライアントからの信頼を得て、デザインや工程の裁量を任され、工期からの制約を受けることなく検討を行った。
- 2) 着工時には基本設計図が施工者に渡され、現場の進行と並行して詳細設計が進められた。
- 3) 平面の検討が先行し、その後立面の検討が行われた。
- 4) 最初期の屋根形状は、複数の屋根が組み合わせられた複雑な形状であったが、村野が曲線を用いて変形させた。
- 5) 初期の曲面屋根では、レセプション・宿泊室・大広間の各部分が連続していた。宿泊室と大広間の間にあるクーリングタワー部の屋根が大型化するのに伴い分断されたが、案の進行とともに、宿泊室と管理諸室の屋根形状や棟高さが変化し、再び連続した。
- 6) クーリングタワー部屋根は、村野の他作品にも見られる大和棟に変更された。西・東面の見付寸法が徐々に大きくなり、レセプション大屋根や宿泊室屋根と大広間の間をつなぐアクセントとして、存在感を増した。
- 7) 大屋根と下屋との分岐部分（西側）は、曲線から直線へ変化し、両者の独立性が増した。
- 8) レセプションホール大屋根と宿泊室屋根を分けるスリットは、当初は直線の構成であったが、後に曲線化し、両部分の独立性を保ちながらも連続させる形に変更された。
- 9) レセプションホール大屋根は、西面見付巾寸法や高さ、屋根の厚みが検討され、徐々に大きくなり、起くりがつけられた。
- 10) レセプションホール大屋根が1階下屋と分岐する部分の取合部形状が、繰り返し検討された。
- 11) 2階宿泊室屋根は、当初は曲面で検討され、その南西部分は1階下屋へ曲面で延びて連続していたが、分離する形に変更された。
- 12) 南側の管理室部分の屋根は、反りと起りが検討されたが、最後はそのいずれでもなくなった。
- 13) 道路際の軒高さは、西側は境界塀と連続する意図が当初より見られた。南側は、当初は2層分の高さがあったが、やがて境界

塀とほぼ同じ高さまで下げられた。

- 14) 東面における宿泊室の屋根と南側管理諸室屋根は、当初はそれぞれが独立していたが、後に軒先が曲線により連続した。
- 15) 確認申請図以降の図面において、それ以前よりも多くの変更が行われた。
- 16) 屋根形状や境界塀、門扉などの検討過程においては、村野の他の作品と同様に、主に模型を用いて形状の検討を行った。
- 17) レセプション上部大屋根の施工では、暫定的に屋根スラブを打設し、その上に木軸により曲面を形成する方法が施工者より提案され、採用された。

これらのことから見てくる松寿荘の立面図の検討過程は、複雑な平面形状と異なる断面ヴォリュームを内包する屋根の形を検討するプロセスであった。平屋建て部分と2階建て部分という異なるヴォリュームや、洋風と和風という異なる雰囲気を持つ諸室が共存する建築に相応しい外観として、屋根や開口部をどのように構成するのか、ということに対する検討の跡が読み取れる。そこには、平面的・断面的に隣接している屋根同士をどう関係付けるのかということ、この様な大きな建築をどのように人のスケールに近づけるかということに対する村野の関心と工夫が現れている。

検討に多くのエネルギーが割かれた大屋根をはじめとして、屋根形状そのものの検討と併せて、隣接する屋根同士の取合部分も推敲が重ねられた。図3に示した様に、大屋根と下屋の取合部には直線が導入され、また図4で示した様に、大屋根と宿泊室屋根の取合部形状では、その曲率が変化した。図5で示した宿泊室屋根と下屋の分離は、宿泊室屋根が起くりのついた曲面形状から変化したことによるものであるが、このような屋根の反りと起くりについても、検討が繰り返された。軒先高さは、玄関やサンルーム、図6で示した洋の食堂と和の大広間をつなぐ下屋等において、状況や空間に応じた寸法を追求することや、境界塀際において道路から見える建物ヴォリュームを低減することに対する意図が見られる。

また、レセプションや食堂と、大広間の間に位置するクーリングタワー部分の大和棟は、その高さが際立って独立的に高められ、全体形態の中でアクセントとして認識される。この部分は、洋と和の雰囲気を切り替える装置として意識されたことが推測できる。

これらのことから読み取れるのは、形態の推敲において、部分の独立性を醸成しつつ、全体構成のバランスを整えていく過程である。曲面や曲線により屋根全体を連続させていた当初の案のように、単一のデザインコードのみに全ての屋根の構成を従属させるのではなく、部分の検討の過程で持ちこまれた直線や、隣り合う部分同士の分節・分離等の操作によって、起承転結の様な抑揚と節度が全体構成の中に生み出されたと言える。部分のアイデンティティを保持しつつ形を整え、それと呼应した形で全体の構成やデザインを収めていくところに、松寿荘の立面の検討過程における特質を見ることができ。この特質は、立面の構成要素における形態操作に関することであり、前項（その1）で考察した平面の変遷との直接的な関係は認められなかった。このことから、村野は、平面と立面の各々に固有の役割を考えていたことが推察できる。

形態や寸法の検討を重ねて、全体の完成度を高める村野の姿勢は、ものづくりに携わる者にとり重要な示唆に富むものである。そこに見る建築家の姿勢と、現代におけるその意味を検証するためにも、

引き続き村野の他の作品における設計過程を追うことが重要である
と考える。

謝辞

本稿において、資料提供や聞き取りなど、調査にご協力頂いた出光興産、鹿島建設の関係者の皆様、並びに村野、森建築事務所元所員の皆様に厚く御礼申し上げます。また、前稿査読時に頂いたコメントに対しましても、本稿の考察のまとめにおいて多くの示唆を得ることが出来たことに感謝申し上げます。

注

- 注1) 福原和則、竹内次男、船越暉由 日本生命日比谷ビルにおける村野藤吾の設計過程に関する研究、日本建築学会計画系論文集 615 号、pp. 229～236、2007.5
- 注2) 角田暁治、福原和則、竹内次男 西山記念会館における村野藤吾の設計過程に関する研究、日本建築学会計画系論文集 627 号、pp. 1147～1154、2008. 5
- 注3) 角田暁治、福原和則、石田潤一郎 平面の検討過程から見る松寿荘の特質について—松寿荘における村野藤吾の設計過程に関する研究 その1—、日本建築学会計画系論文集 679 号、pp. 2181～2189、2012. 9
- 注4) 立面の変遷の分析に必要なものは、必要に応じて本文中に個々に示す。
- 注5) 京都工芸繊維大学美術工芸資料館において、村野藤吾の設計図面のフォルダを管理する帳票である総合リスト (Togo Murano Drawing List) には、フォルダ毎に枚数が記載されるが、詳細調査の結果に対応して日々更新されている。
- 注6) 京都工芸繊維大学美術工芸資料館が所蔵する松寿荘図面のフォルダ毎の内訳は、AN.4898(69 枚)、AN.4980(65 枚)、AN.4981(72 枚)、AN.4982(68 枚)である。
- 注7) 詳細図における検討内容は、一般図に反映されと考えられるため、本稿においては基本設計図における立面図を分析対象とする。
- 注8) 出光興産所蔵資料 (S54.7.12 付) には、「役員用の寮と併せて、内外の賓客をお迎えする建物」が求められた旨の記述がある。「松寿荘について」と記されたこの資料は、その日付から竣工時にプロジェクトの経緯を振り返って記されたものと考えられる。
- 注9) 前掲注 8 の出光興産資料による。また、設計図面における建物名称は、当初は「出光興産株式会社迎賓館」であるが、やがて「出光興産麻布邸」と変化している。
- 注10) 俳優の長谷川一夫がオーナーであったことから、通称カズオスタンドと呼ばれている。
- 注11) 村野、森建築事務所 (以下、村野事務所) 元所員大泉武雄へのインタビューによる。(日時：2007. 11. 8 聞手：福原和則)
- 注12) 『松寿荘』所収「松寿荘の建築について」の中で村野自身が記している。新建築社、1983.6.30
- 注13) 当時の担当所員の一人である時園國男がインタビューにおいて答えている。『村野藤吾建築選集補遺』所収 「松寿荘について」p.102 同朋社
- 注14) 『松寿荘』(前掲注 11) で村野自身が語っているが、出光興産に残されている資料 (前掲注 7) にも、店主から「設計は村野藤吾先生にお任せし、工事は鹿島建設に請け負って貰い、一切口出ししてはならない旨の指示があった」との記述がある。
- 注15) 鹿島建設議事録 (S52.12.9) による。
- 注16) この図面は、出光興産所蔵の資料である。
- 注17) 前掲注 3 による。
- 注18) 元所員大泉氏も同様の内容を述懐している。(前掲注 11)
- 注19) 1977.11.22 付鹿島建設工事資料に、「詳細図がありませんので、各所の納まりを施工図にて十分に検討する必要があります。」との記述がある。
- 注20) 設計工程表には、実施設計図面完了時の施主承認は記入されていない。元所員大泉武雄によると、施主である出光店主には、コンクリートが打ちあがった時に、荻島造形に依頼し制作した内部まで再現された木製の全体模型を用いて、村野自らが説明したという。(前掲注 11)
- 注21) 出光興産資料 (前掲注 8) による。
- 注22) レセプションと食堂の間の屋根は、コンクリートを壊して打ち直していたという。(前掲注 12) このような進め方に加え、箱根プリンスホテル等のプロジェクトが同時進行していたため村野が現場に来ることができず、

- 工程の遅れが発生したと考えられる。(前掲注 11)
- 注23) ①と②、⑨の間に作成されたと見られる二種類の立面検討図が、『村野藤吾建築選集』(同朋社)に掲載されている。これらの図面は、京都工芸繊維大学美術工芸資料館には収蔵されておらず、原因が確認できないため本稿の分析対象としては扱わない。この図面からは、クーリングタワー部屋根の一部が変化して肥大化し、周辺の屋根から独立した大和棟形状となる萌芽が見られる。
- 注24) 港区役所に残されている台帳から、申請受付は 1977.8.30、確認済証発行が 1977.10.4、検査済証発行が 1979.6.8 であることが分かった。
- 注25) 竣工図の日付は'77.11.01 である。これは着工段階での最終図面に工事中的の変更項目を反映させたためと考えられる。
- 注26) 前掲注 11 による。残念ながら、変形前の図面は見つかっていない。
- 注27) この図中には「ムスタング」との書き込みも見られ、村野が、流線型のスポーツカーであるムスタングを屋根形状のモチーフにしていたことが分かる。
- 注28) 道路側の軒先を低く押えることと、内部で要求されるヴォリュームの確保を両立させるため、「屋根はしだいに形を崩し、自由な形にしなければ納まりがなくなかった。それはそれなりにまとめ合わせたのが特徴であるといえよう。」と村野も述べている。『松寿荘』(前掲注 12) 所収
- 注29) 以下、本稿においてはこの部分の屋根を「大屋根」と称す。
- 注30) この屋根は村野がよく用いる「大和棟」である。
- 注31) 確認申請図 (AN.4980-49) では大広間の天井高さは 2,400mm であり、竣工図 (AN.4980-15) では 2,575mm である。この変更により、既に施工されていた梁が外壁際で露出したが、村野はそれを意匠的な要素として、天井デザインに取り込んでいる。
- 注32) 西側道路境界塀は①から描かれており、当初の施主要望への関心が見られる。
- 注33) 出典『村野藤吾建築選集補遺』(前掲注 13) 所収 「松寿荘について」p.89 同朋社
- 注34) 前掲注 11 による。
- 注35) 前掲注 11 による。
- 注36) 施工担当の鹿島建設の加藤征治の述懐による。『村野先生と私』所収「景色を作る (南麻布松寿荘)」1987.2 村野、森建築事務所
- 注37) 前掲注 20 による。
- 注38) 前掲注 13 による。
- 注39) 鹿島建設議事録 (S.5210.31)による。
- 注40) 先行して打設された RC 躯体の上に、他の素材で最終形を形成する手法は、村野の他の作品でも見られる。初期の「ドイツ文化会館」における<RC+木軸>の屋根、「日生日比谷ビル」における<RC+石>の外壁、最晩年の「谷村美術館」における<RC+モルタル、ボード>の壁等である。この工法は、建築表現の実現に対する施工上の合理性のみならず、村野が語るストラクチャーライフとコマーシャルライフの問題にも関係すると考えられる。また、日生日比谷ビルが発表された『新建築』における村野との対談で、浜口隆一は、日生ビルにおける躯体の上に施された石張りの表現は、その厚みがあることから「骨」や「皮」ではなく「果肉」と表現しており、その意図に村野も同意している。『新建築』1964,1 月号 pp.123-128
- 注41) 前掲注 11 による。
- 注42) 鹿島建設議事録 (S.53.5.22)による。この中で、村野がアスファルト防水を嫌ったとの記述があるが、その理由は不明である。
- 注43) 空調機器の運転において、排気した空気が再び吸い込まれることを言う。この状態では、機器が正常な状態で作動しない恐れがある。クーリングタワー部屋根形状は繰り返し検討された部分である。早い段階で屋根が大型化していることから、村野がこのような機能的な理由を早くから意識して形態に反映した可能性がある。
- 注44) 鹿島建設議事録 (S.52.12.8)による。コルテン鋼とアルキャストでは、素材の質感の相違により仕上の雰囲気異なるため、どちらの素材が相応しいのかを考慮して、村野が変更したと推察できる。

(2013年4月8日原稿受理、2013年6月20日採用決定)